

論文の内容の要旨

論文題目 地域高齢者における日中の眠気と認知機能低下との関連：
横断調査に基づく予備的研究

氏名 岡村毅

緒言

日中の眠気は頻度が大きく社会的に重要な中枢神経系症状であるが、日中の眠気の病態生理や分子基盤が徐々に明らかにされつつあり、眠気を主要な症状とする疾患の臨床知見も蓄積されつつある。一方で近年、日中の眠気は認知機能低下の危険因子であるという報告がなされている。しかし調べ得た限りでは本邦においてはこれに関する報告はない。

研究 I

方法

対象：東京都 A 区在住の 65 歳以上の全高齢者のうち、4 月～9 月生まれで、施設入所中の者、要介護要支援認定を受けている者を除く 3195 名を住民基本台帳に基づいて対象とし、1494 名のデータを解析した。

調査項目：主観的記憶障害、日中の眠気、睡眠不良、人口統計学的要因、生活状況要因、健康関連要因を調査した。

統計解析：主観的記憶障害を目的変数とし、日中の眠気を説明変数とし、他の要因を調整変数とした段階的多変量ロジスティック回帰分析を行った。

結果

日中の眠気は、他の要因を調整しても主観的記憶障害と関連した。

研究Ⅱ

方法

対象：東京都 B 市で、市の高齢化率に近い 2 地区において 65 歳以上の全高齢者 7682 名を住民基本台帳に基づき対象とし、6269 名のデータを解析した。

調査項目：主観的記憶障害、日中の眠気、睡眠不良、人口統計学的要因、生活状況要因、健康関連要因を調査した。

統計解析：主観的記憶障害を目的変数とし、日中の眠気を説明変数とし、他の要因を調整変数とした段階的多変量ロジスティック回帰分析を行った。

結果

日中の眠気は、他の要因を調整しても主観的記憶障害と関連した。

総合的考察

東京都の 2 地区において、日中の眠気が認知機能低下の予測因子であることを横断研究で予備的に明らかにした。本研究の限界は(1)病態生理の詳細な調査がない点、(2)記憶障害が客観的心理検査によるものではない点、(3)薬剤の調査をしていない点、(4)横断研究のため因果関係が不明であり今後縦断研究によって確認する必要がある点、である。